

大学生の専攻意識とキャリア選択に関する研究

進 華奈子

2016年9月から2017年7月までの約1年間、ドイツに交換留学をしていた際にドイツでの就職活動に関して得た知識と帰国後自分が実際に経験した日本における就職活動を比較して、日本とドイツでは就職活動事情が全く異なることを知った。ドイツでは、大学で学んでいる専攻分野と就職先の仕事が直結するように学生に対して即戦力を求める企業がほとんどであるのに対し、日本の企業は大学で学生が何を学んでいるのかというよりも、学生の経験、人柄や性格を重視するような、いわゆるポテンシャル採用を行なっている。

本研究では、そのような就職活動事情を持つ日本の学生は、大学に進学することを決め、大学ではそれぞれが選択した専攻を学び、そして卒業後のキャリア選択をするという過程においてどのような考えを持って選択しているのか、また、大学卒業後の進路を考える際には、現在自身が学んでいる専攻に対する意識はどれくらい影響しているのかを明らかにすることを目的とする。

研究の枠組みとして、大学生がキャリアを選択する際には、まず大学進学前に抱いていた“大学進学動機”が存在し、それに加えて、在学中に形成されていった“仕事に関する価値観”や大学での“専攻分野に抱いている意識”の3つの大きな概念が将来のキャリアを考える上での材料となっていると考えた。これらの要因がどのように相互に関係し、学生のキャリア選択の思考に影響しているのかを明らかにするため、“大学進学動機”、“仕事に関する価値観”、“専攻分野に対する意識”に関する質問項目をそれぞれ準備した。“大学進学動機”、“仕事に関する価値観”に関する質問項目は先行研究を参考にし、“専攻分野に対する意識”に関してはオリジナルで質問項目を作成した。研究方法は量的調査を実施した。質問紙調査とWeb調査によって筑波大学の学部4年生、大学院2年生を対象に調査を実施し、149の有効回答を得られた。

結果として、専攻に対する意識に関して、専攻に対する意識と大学進学動機における相関でも、専攻に対する意識と仕事に関する価値観における相関でも関係性が見られた。しかし、やはり専攻に対する意識と仕事に関する価値観における相関においては相関が強いことを示す因子が少ない上に数値も低い値を示し、日本の大学生は所属する専攻と将来の仕事とを切り離して考えていることがわかった。

(指導教員 歳森 敦)